近代日本洋画における「官展アカデミズム」の成立と展開

高山百合

本論文は、明治 40 年(1907)における文部省美術展覧会の設立以後に確立され、その後の歴史において功罪含めて常に大きな影響力を持ち続けた「官展アカデミズム」の成立と展開について考察するものである。

「官展アカデミズム」とは、戦前に国家の権威のもとで開催された文展、帝展、新文展の総称としての「官展」に、その権威主義的性格や啓蒙的性質を示す「アカデミズム」という言葉を合わせた用語である。戦後日本の美術史研究では、「官展アカデミズム」の負の側面を主張する言説が優勢であり、反官展の作家と作品によって日本近代美術史の枠組みと方向性が定められた一方で、「官展アカデミズム」は十分な研究対象とならず等閑視されてきた。

そのような研究史を踏まえ、本論文では次の 3 つの問題意識を強調した。それは、第 1 に「官展アカデミズム」においては表現や主題のわかりやすさゆえに、その意義や重要性が十分に議論されていないこと、第 2 に「官展アカデミズム」を一元化せずに、多面体と捉えたうえで、様々な側面から各論を積み上げていくことが重要であること、第 3 に美術表現における「戦前と戦後の連続性」という視点から、個別の作品や画業を検証し直す必要があることの 3 点である。これらの点を考慮しながら本論文では、おもに大正期から昭和戦前期の美術を主たる射程としながら、近代日本洋画における「官展アカデミズム」の成立と展開について時代を追いながら連続的にたどり、複数の作家とそれに付随する活動を取り上げ、その意義や重要性を俯瞰的な視点から再検討することを目的とした。

第 1 章と第 2 章では、「官展アカデミズム」の作家の共通課題としての日本的裸婦像の創出と「理想画」の問題に着目し、岡田三郎助の《水浴の前》と中澤弘光の《かきつばた》という大正期の官展を代表する 2 作品について論じた。寓意的で象徴的な意味内容を持つ絵画を西洋美術の正統として受容した「官展アカデミズム」の画家たちにとっては、絵画に寓意性や象徴性、物語性を込めた「理想画」を作り出すことがひとつの命題であった。岡田三郎助の場合は、西洋の伝統的主題である「水浴図」を翻案したうえで、画中に取り合わせた松虫草の花に、西洋由来の悲恋物語を象徴させた。一方で中澤弘光の場合は、大正期の琳派ブームを背景に、能の謡曲である「杜若」の物語を再解釈して表現した。ただし、謡曲のテクストそのものを絵画化したのではなく、当時盛んに受容されていたシャヴァンヌの絵画も下敷きにしながら、同時代の「能画」や「能絵」には類を見ない、幻想性に富んだ独自の作品を作り上げた。

第 3 章では、岡田三郎助が主宰した本郷絵画研究所と春台美術展について論じた。東京美術学校の補助的機関としての機能を持った研究所という制度が「官展アカデミズム」を一層強固にしたことに加え、岡田を中心とする豊かな人的ネットワークによって実現された工芸を重視する独自の活動にも着目し、昭和戦前期における官展系美術団体としての意義を考察した。

第 4 章と第 5 章では、昭和期の「官展アカデミズム」を牽引した中村研一を取り上げた。第 4 章で論じた《瀬戸内海》は、中村が連続的に手掛けた、「現代風俗」に題材を求めた人物群像作品のひとつの帰結点と評価すべき作品であるが、繁栄を謳歌しながらも翳りがある、昭和初期の時代特有の雰囲気を持つ。その舞台となった「瀬戸内海」の同時代的意義に加え、主題としての同時代性や視覚的な新しさについても考察した。第 5 章では、「戦前から戦後への画業の連続性」という視点を主軸に、従来戦争画のみが突出して評価されてきた中村の画業の連続性を、戦争画以前に遡って再検討した。「理想画」からの展開としての「現代風俗画」や、当時の流行主題としての「家族像」の成立とその意義を論じ、さらには戦時期の制作が戦後にどのように継承され、逆に変容したのかを明らかにした。

第 6 章では、戦後の日展系作家の代表格である田崎廣助を取り上げ、「官展アカデミズム」の多様化と展開を検証した。彼の代名詞でありながらも、戦前と戦後の画業を大きく断絶させている山岳風景画の成立背景とその意義を、時代的要因や同時代美術との関わりもかんがみながら論じた。

このように本論文では、先に挙げた 3 つの問題意識に基づき、個別の作家と作品に即してその制作意図や成立背景、時代背景を明らかにすることを通して、日本近代洋画における「官展アカデミズム」の成立と展開について考察した。それは、一面的な「官展アカデミズム」批判の言説を相対化し、従来の美術史研究では十分に議論されてこなかった「官展アカデミズム」の重要性や歴史的意義について今一度検証することに繋がる。そして、各時代の個別の作品から抽出された官展系作家たちの制作理念や独自性を明らかにし、つなぎ合わせていく作業を通して、西洋のモダニズム美術史観に沿って展開された日本近代美術史の流れを大きく押し広げた、もうひとつの新たな美術史を描きだすことを本論文の目的とする。